

介護に携わる人の応援マガジン

月刊 介護保険

2016
3
vol. 241

特集

「介護離職ゼロ」の実現に 協力を

— 平成27年度全国厚生労働関係部局長会議 —

現地ルポ—自治体編

若者による取り組みが高齢者の生活を支える
島根県雲南市の取り組み

現地ルポ—事業者編

高齢者の日常に外からの風を送り込む
ケアハウス「アーベイン八幡平」
(岩手県八幡平市)

仕事に役立つ! 実務解説

市町村初! 稲城市が医療計画を策定

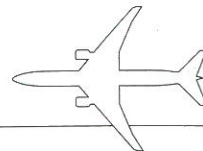
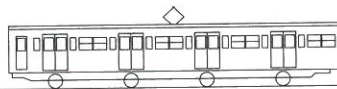
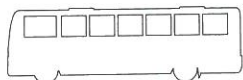
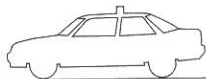
レポート

個性派サ高住の取り組み
独自の色を出し“選ばれるサ高住”へ



株式会社 法研

おかげさまで 創立
20th



第36回(最終回)

街

へ出よう!

〈介護予防・日常生活支援総合事業編〉

“幸せな国”の 資源としての外出支援

生活支援サービスの担い手となる人材を、地域で養成している方の話をうかがったことがあります。そこでは、農家の協力を得て畑仕事をする事で、健康づくりや高齢者の就労支援を行っています。日本人は勤勉ですから、リタイア後の高齢者には仕事を頼むのが一番元気になることがわかっているからです。こうした働き方は「生きがい就労」と呼ばれ、高齢化する農家を助けながら高齢者も健康になり、かつ地産地消が進むという“三方よし”の取り組みにみえました。

ところが、労働者の就労環境を守るための最低賃金制度が邪魔をするというのです。このケースでは農家側は、「同じ賃金を払うなら、高齢者より若く働きのいい人を雇いたい」と考えるそうです。一方で高齢者は、「ボランティアでは困るが、健康づくりを兼ねた生きがい就労だからフルタイムの賃金などいらない。半額でも十分」と言います。「余裕をもって働こうと思うのに、制度があるためにそうもいかない」と、今は互いに苦慮しています。社会保障や法制度は、国民生活を守る下支えとなってはいますが、制度を頼るだけで誰もが幸せになれるとは限りません。

先日、ある夫妻を横浜港へお見送りに行ってきました。「白木の箱に入って帰ってきてもいいの」。そう言って老婦人は、夫と長旅へ出かけていきました。80歳を目前にして脳卒中で倒れ、普段は施設で過ごす夫を気の毒に思い、「たまには旅行へ連れ出したい」と、身体に負担の少ない船旅を選んだそうです。船上では毎日のように催しがあり、旅先で時間をもて余すことのないよう演出されていますが「そういうのはいいの。私たちは海を見ているだけでホッとするから」「海からは、イオンみたいないいモノが出てるでしょ」と、静かに微笑みながらいかに穏やかに過ごしたいかを教えてくれました。また、「戦争に負けたから旅行に出られる。もし勝っていたら、軍人が威張っていて、私たちにこういう暮らしはできなかった」と、繰り返しお話しされていたことも印象的でした。

旅へ出ようと決めたときは、家族にも施設の方にも付き添いは無理と断られ、「3カ月を越える長旅で、何かあったらどうするのか」と反対されてばかりでした。ただ1人、施設を経営する病院長だけが、「行ってらっしゃい」と言ってくれたと喜んでいました。そして、「こういうサービスがあってよかった」と、同行するトラベルヘルパーに何度も繰り返してくれました。

戦後、日本は軍国主義ではなくなりましたが、私たちの生活に関わる制度や規制をつくる仕組みは今もあります。規制するのも人ならば、それを活かすのもまた人です。私たちは、幸せな国の資源として、これからも楽しく深い思い出づくりのできる“お出かけ”を提供していこうと思っています。



NPO法人
日本トラベルヘルパー協会
理事長 篠塚 恭一

PROFILE しのづか・きょういち

株式会社SPIあ・える倶楽部代表取締役。
平成18年にNPO法人日本トラベルヘルパー
(外出支援専門員)協会を設立。

※本コーナーは今月号をもって終了します。3年間、ご愛読ありがとうございました。